

## 周作人とH・エリス

——一九二〇年代を中心に——

小川利康

### 序

周作人自身、晩年の著書『知堂回想録』でハプロック・エリス (Havelock Ellis) に「心服する」理由について、『性の心理』(エリスの著書) が「事実と理論を授けてくれる」だけでなく、「透徹した観照から生まれた見解や論断」が他の性学の大師には見られぬもので①、「道理に叶い、保守的でもないし、急進的でもないと思われ、私

の見たところ、なかなか中庸に叶っている。」①と語っている。その「中庸」を説明するため、以下のエリスの言葉を同書で二つ引く。  
禁欲や耽溺を唯一の目的とする者がいるが、その者は生活をする以前に死んでいるのだ。

生活の芸術、その方法はひとえに取と捨を微妙に混合することにある。 (同上) ②

また、「素晴らしい人生観である」として次の文章を引く。

或る人は私の意見を余りに保守的だとし、或る人は余りに過激だ

とする。世には何時でも過去をつかまえて放さない人と、自分達の考える未来を捕まえようとする人がいる。しかし、賢い人は両者の間に立ち、どちらにも共感し、自分達が永遠に過渡期にあることを知っている。何時であろうと、現在は単なる交差点で、過去と未来の出会い場で、我々は両者に対し何ら不満を持つわけにいかない。伝統無くして世界は無く、活動なくして生命は無い。

『性心理之研究』跋文) ③

これらが周作人の言う「中庸」である。伊藤敬一④は周作人の特徴として「一つの方法として意識的に二元的な思考方法を駆使している。」点を指摘するが、具体的にはこうしたエリスの影響を念頭においての発言であろう。いずれも性への偏見打破のために闘ったエリス自身の言葉である事は無論だが、周作人は一九二〇年代以来、晩年まで幾度となくこの言葉を引用する。エリスの文章の選択・翻訳によって自らの見解を表明する手法は周作人自身、意識的に用いたもので⑤、引用・翻訳は単なる借り物ではない。その意味で、エリスの文章の引用と

解釈の具体的検討が、周作人の文学を解明する上で重要な課題となるが、従来の周作人研究では指摘こそあれ、具体的な検討は未だ行われていない⑥。本稿では周作人の文学活動の初期に遡り、エリスの影響がどのような過程を経て定着したのかを検討する。

エリスの影響が『知堂回想録』と一致する形で定着した時期を確定することは困難である。だが、周作人に関する評論を集めた『周作人論』(三四年刊)の巻頭に「周作人自述」で、一九三〇年に『燕大週刊』に書いた自分の文章を引き、「読んだ書の中で最も大きな影響を受けたのはエリスの著作である。」⑦と述べることから、『知堂回想録』と同じ「中庸」という言葉を用いていないにせよ、エリスの影響が基本的には三〇年以前に定着した事は確実である。

そこで、三〇年までの周作人のエリス引用を別表に整理してみると、引用は二三年と二四年に集中している。二四年当時、周作人は『晨报副鐫』に寄稿していたが、やがて同紙を去り⑧、魯迅・孫伏園・錢玄同・兪平伯等と週刊『語絲』を発刊するに至る。『語絲』の北京での刊行期(二四年～二七年)のうちで、二四年はこの雑誌の実質的主編の役割を担った周作人にとって過渡期にあった。先に示したエリス『断言』・『性心理之研究』からの言葉を初めて引用した(『蕪理斯的話』)のも二四年であり、エリスの影響の実質上の定着は、二四年前後まで遡れるのではないだろうか⑨。以下では、別表に基づき、一八年当時のエリスの受容、『自[己]的園地』『緑州』を中心とする二三年当時の受容、『雨天的書』を中心とする二四年当時の受容の三段階に分けて検討す

る。

#### 序、注記

①『知堂回想録』(三育図書有限公司一九八〇年刊)二〇二、拾遺十一、性的心理 p. 694

②同書、二〇二、拾遺十二、蕪理斯的思想 p. 695、エリス原文(以下Eと略記) p. 220、尚、周作人は「論聖芳濟」を「聖芳濟及其他」とも訳すが、本稿では前者に統一した。

③同書、p. 695、E p. 641、この書は、イギリスで初版第一巻の刊行後に発禁となり、アメリカで刊行された。邦訳に『性の心理』(鴛尾浩訳・冬夏社大正十年刊)がある。ただ、非売品で伏せ字が多く、周作人が引用する跋文は訳出されていない。尚、周作人は『性心理之研究』を『性的心理研究』とも訳すが、本稿では前者に統一した。

④「周作人と童話」(都立大『人文学報』42期・一九六四年三月) p. 2

⑤「蕪理斯感想録抄」(別表参照)を収める『永日集』(北新書局初版・実用書局一九七二年影印)序(一九二九年二月)で、「(翻訳の)言葉自体が私の手で書かれ、内容も私の好きなもので、思いつかず、言えなかったものである。それを私が一人占めするのでもなく、借用して差し支えないと思う。」とする。

⑥松枝茂夫「周作人——伝記的素描」(『中国文学』第六十号、一九四〇年)、飯倉照平「初期周作人についてのノート」(上・下)(神戸大『文学会研究』38号・一九六六年、40号・同六七年)木山英雄「周作人」(『近代中国の思想と文学』所収、大安一九六七年刊)等言及するものは多い

周作人のエリス引用一覧 (1930年以前・文章を引用するものに限る)

西暦(年)	題名(所収単行本)(発表月)	出典書名(訳題及び原題, 参照したテキスト, 刊年)
1918	〈愛的成年〉(『談龍集』) (1)	『性之進化』 <i>Women and Marriage; or Evolution in Sex</i> . Repr. from the "Westminster Review" W. Reeves. London. 1888. 『新精神』「恵得曼」 <i>The New Spirits; Whiteman</i> . The Scott Lib. 1892.
1923	〈猥褻論〉(『自己的園地』緑州) (2)	『感想録』 <i>Impression and Comments; 1st series</i> . Houghton Mifflin Company, Bost. & N. Y. 1914.
	〈結婚的愛〉(『自己的園地』緑州) (4)	『断言』「論聖芳濟」 <i>Affirmations; St. Francis and Others</i> . 同書「凱沙諾伐」; <i>Casanova</i> . Walter Scott, London. 1892.
	新詩〈高棲〉後記(未収録) (4)	『断言』「凱沙諾伐」同上
	〈文芸与道德〉(『自己的園地』緑州) (6)	『断言』「論左拉」同上 ; <i>Zola</i> .
	〈愛的創作〉附記(『自己的園地』緑州) (7) * 編訂時に追加	『性心理之研究』「色情的象徴」 <i>The Studies in the Psychology of Sex; Erotic Symbolism</i> . William Heinemann LTD, London. 1950.
1924	〈花砲の趣味〉(『自己的園地』茶話〈爆竹〉に全文引用) (2)	『人生之舞踏』第一章 <i>The Dance of Life; Introduction</i> . Houghton Mifflin Company, Bost. & N. Y. 1924.
	〈薩理斯的話〉(『雨天的書』) (2)	『性心理之研究』跋文. 前掲書 ; <i>Postscript</i> . 『断言』「論聖芳濟」前掲書
	〈教訓之無用〉(『雨天的書』) (2)	『人生之舞踏』「道德之芸術」前掲書 ; <i>The Art of Morals</i>
	〈科学小説〉(『雨天的書』) (9)	『社会衛生の事業』第七章 <i>The Task of Social Hygiene; Religion and The Child</i> . Constable & Co. LTD, London. 1912.
	〈生活之芸術〉(『雨天的書』) (1)	『断言』「論聖芳濟」前掲書
	〈論左拉〉(『芸術与生活』)(注記⑥参照)	『断言』「論左拉」前掲書
1925	〈薩理斯感想録抄〉(『永日集』) (1)	『感想録』; <i>1st series</i> . 前掲書 ; <i>2nd series</i> . 1921. ; <i>3rd (and final) series</i> . 1924. Constable & Co. LTD, London.
1926	〈爆竹〉(『自己的園地』茶話) (3)	〈花砲の趣味〉を参照。新たな引用はなし。
1927	〈隨感録・十七, 再談香園〉(未収録) (8)	『性心理之研究』「愛的芸術」前掲書; <i>Art of Love</i> .

が、具体的検討を行った論考は管見の限りでは見当たらない。

【『新精神』⑩】

ている。

- ⑦「周作人自述」(『周作人論』北新書局初版・上海書店一九八七年影印)  
 ⑧当時『晨报副鵝』の編集に当たっていた孫伏園が、編集方針の対立で二四年に辞職した。これに従い、殆どの寄稿者が同紙を去った。  
 ⑨「鶴理斯的話」(『雨天的書』岳麓書社一九八七年刊)で、周作人はエリス『性心理之研究』について「この種の精密な研究は或いは他の人でもできようが、あのような幅広い視野、深い思考はまことに得難い。」と述べ、『知堂回想録』での評価と対応している。

### 一 一八年当時のエリスの受容

この年、周作人は初めて白話による翻訳以外の文章として『新青年』に「説武者小路実篤君所作一個青年的夢」を書き、年末には「人的文学」を発表するなど、積極的に自己の見解を述べ始め、エリスを初めて引用する。同年「愛的成年」で引くエリス『性之進化』・『新精神』の文章は次のようである。

人民の生殖は社会の機能である。だから、我々は断定する。女子の出産は彼女が社会の義務を果たすがゆえに、自活できなければ、社会は彼女を養わなければならないのだと。(『性之進化』⑩)

宗教、政治において、我々は大きな闘争を経て、ようやくかけがえない自由と真実を手に入れた。しかし、性の分野では我々の道徳、社会生活と同じ幸福を、いまだ手に入れていない。現在もまだある種の野蛮な伝説が中世の教会の懸念な宣伝を経て、世に流布し

これらは当時日本でも流行したホイットマンと並んで知られるカーベントナーの著書『愛的成年』(Edward, Carpenter. *Love's Coming-of-age*)を紹介するための引用である。どちらも女性の性的差別を否定し、その地位向上のために偏見を捨てるべきだと主張する。これらは、與謝野晶子「貞操論」(原題「人及び女として」)の翻訳(一八年『新青年』第四卷五号)での女性だけを貞操で拘束する事への反対と共通した女性擁護の立場に立つものと思われる。これについて、翌十九年の胡適と藍志先との誌上討論に割り込む形で書かれた「答藍志先書」でも論じており、次のように述べている。

第二に、先生の提唱する貞操とは、どんな意味なのか？ 先生の言う貞操は純潔(Chastity)なのか、誠実(Fidelity)なのか？(中略)なぜなら貞操という言葉は慣習上、肉体の純潔を指し、強いられて守る貞操の根本だから誤解しやすい。ただ、先生は貞操がそのまま性欲を節制するか、(Abstinence)かのように言っておられ、にわかには判りかねる⑩。

引用文の最後に見える Abstinence には訳語も付されていない。雑誌掲載の文章ゆえ、訳語の欠落とも考えられるが、「性欲を節制するか、(Abstinence)か」という貞操を女性のみに強いる考え方への反発があった事は疑えない。また、この英単語を引いた時、周作人の念頭に「愛的成年」に引くウィリアム・ブレイクの詩があったと考えられる。これは先程のエリス『新精神』と並べて引用される。

赤らんだ手足、燃える髪の上に

禁欲 (Abstinence) はいちめんじ砂をまく

しかし、満ちたりた欲求は

そこに生命と美の果実を植える<sup>⑩</sup>

漢訳された詩句の中でも唯一「禁欲」にだけは英語を、ここでもカッ  
コ付きで示している点に注意を引く。これはスパージョン『英文学上  
の支秘主義』<sup>⑫</sup>の一節として引くもので、詩とともに引くスウィンバ  
ーンの解説「世の唯一不潔なものは、不潔だと信じてる考えそのもので  
ある。」<sup>⑬</sup>を見れば、周作人の意図は明らかで、先に引くヘリスの言  
葉と同様、欲求を不潔なものとして禁圧する事への反発であろう。以  
上の所から、ブレイクとヘリスは当時、周作人が性への偏見やそれと  
表裏をなす女性蔑視を否定する根拠であり、五四時期の周作人の思想  
の一部をなすと考えられる。

五四時期の文学革命の向かうべき方向を提示した「人的文学」の冒  
頭で人間を定義するために、ブレイクの詩「天国と地獄の結婚・悪魔  
の声」の一節を引用したが、その一部は「愛的成年」の文末でも引か  
れる。

(2) エネルギーこそ唯一の生命でありエネルギーは肉体から生  
まれる。理性はエネルギーの境界というか円周である<sup>⑭</sup>。

この詩句とヘリスの言葉「ホイットマンは下腹部と頭部胸部を同等と  
みなした」<sup>⑮</sup>はカーペンターの意見に似ており、「より明白に述べ、  
より實際面を重んじている」<sup>⑯</sup>が故に、カーペンター『愛的成年』は

評価される。この年の「愛的成年」でのヘリスの引用も、ブレイクの  
詩句による靈肉一致の理想をより具体的に表明するものと見られる<sup>⑰</sup>。

#### 一、注記

<sup>⑩</sup>『談龍集』(開明書店四版・上海書店一九八七年影印) p. 267 p. 263f. E『性  
之進化』p. 15. E『新精神』p. 126f.

<sup>⑪</sup>『新青年』第六卷四号「討論」に掲載。

<sup>⑫</sup>『談龍集』p. 263 原文は Spurgeon, Caroline F. E. MYSTICISM IN  
ENGLISH LITERATURE: DEVOTIONAL AND RELIGIOUS  
MYSTICS. 1913. Reissued in 1970. by Kennikat Press. p. 137 以下。

原文でブレイクの詩の一・二行目を逆に引用しており、改めていな  
い。邦訳は『ブレイク詩集』(寿岳文章訳、弥生書房一九六八年刊)に  
よる。尚、この時期のブレイク受容については稿を改めて論じたい。

<sup>⑬</sup>『談龍集』p. 263 MYSTICISM IN ENGLISH LITERATURE p. 137.

<sup>⑭</sup>『芸術与生活』(上海群益書社初版・実用書局一九七二年影印) p. 14・原  
文は Geoffrey Keynes ed. Blake Complete Writings: Marriage  
of Heaven and Hell; The Voice of The Devil. 1969. OXFORD. を  
参照した。邦訳は『みみずく英学塾』所収「ブレイク文学における  
エネルギー概念」(由良君美著、青土社一九八七年刊) p. 94の引用文に  
拠った。

<sup>⑮</sup>『談龍集』p. 692. E『新精神』p. 127

<sup>⑯</sup>『知堂回想録』一三三、文学与宗教 p. 394で、「この時期、私は当時  
のロマンティックな文芸思想によって文学活動をしていたが、その

所謂ロマンティックな思想は(中略)『人的文学』で示された。私は婦人問題を考慮したので、『前掲のエリス『性之進化』の引用』とするに至ったが、文学で論じたのはやはり空っぽの人類だった。」と述べる一節は、この裏付けとなろう。

## 二 『自己的園地』『緑州』での受容

一八年「愛的成年」以後、二二年までのおよそ四年間、エリスの引用はない。この間に周作人は一九年、二〇年と「新しき村」の紹介を中心に精力的に文筆活動をしたが、二二年には、半年近く北京郊外の西山で療養生活を余儀なくされる。二二年からは「自己的園地」を始めたとする文芸評論を書き始め、「詩的効用」等では兪平伯、梁実秋らと論争し、二三年には処女散文集『自己的園地』を刊行する。また、魯迅との訣別も同年夏であった。ここで問題とする『自己的園地』『緑州』とは、同年初めから夏までに書かれた同書の最後を飾るものである。この時期に於ける引用は大きく二つの傾向を持ち、表裏を成す。一つは一八年の延長線上にある。「結婚的愛」は『結婚的愛』(Marie, Stopes. *Married Love*)を紹介する文章だが、その中で『愛的成年』にも触れ、『結婚的愛』の読者への忠告として性的偏見による女性差別を批判するエリス『断言』『論聖芳濟』を引用する。

聖パウロは言う。「物すべてに不潔な物など元々ない。単に人が不潔であると考えると、彼にとっては不潔となるのだ。」と。エリスは「論聖芳濟」で言う。「我々はいま全てを直視し、なんら余り

に卑俗すぎ、或いは神聖すぎて研究に適さないようなものはないと思っている。だが、直視するのが逆に有害な事実もある。もしも、あなたが汚れなしに見られぬのならば」と⑩。

これはブレイクの詩を引用した際のスウィンバーンの言葉「世の唯一不潔なものは、不潔だと信じる考えそのものである。」⑪と同じ考え方と言える。不潔とは、性を念頭においての言だから、猥褻と考えるか否かは受け取る側の問題とする考えである。だが、この言葉を引用したのには、一八年と異なる理由があった。この引用に続き、カッコで括って控え目に述べる言葉がその背景を示している。

(私は全てを破壊すると大言し、責任を負うことも知らずに、人を傷つける所謂自由恋愛の男を非常に恐れているのだ)⑫

これは、当時『晨报副鵠』紙上で行われた「愛情問題」論争の中での男性の論者への失望と関連がある。同紙では男性側の一方的な離婚宣言に端を発し、二三年三月〜六月(五月から「愛情定則的討論」として)の間、紙上討論を連載した。この中で周作人は「関于誰は犠牲的問題」(三月)で『愛的成年』を紹介するほか、「離婚与結婚」(四月)では、親の取り決めた結婚の不合理さには同情し、「不合理な礼教や習慣とやりに反対するのは、もとより良いことで正当だ、(「離婚与結婚」)⑬と認めつつも、「まるで不合理な礼教や習慣とやらの温床が、彼と王女士の結婚だけにあり、離婚さえすれば、目的はすぐ達せられるかのようなだ。」(同)⑭と、自分は潔白で、女性だけが不潔な存在だと利己的な自由を主張する男性側を批判している。

この後、「愛的創作」では與謝野晶子の著書を紹介し、愛情は永遠に不変ではなく、毎日向上させる努力が必要だと説き、道学者が貞操の名で女性を束縛する事に反対する。『自己的園地』を編集する際にも同趣旨の言葉をエリスから引用し、見解の変化は見られないが、「愛は与えるもので報酬ではない。中国の結婚はやはり取引で、その違いは余りにも大きい。」と失望を示す<sup>②①</sup>。これを契機に周作人は、差別される女性の弁護から差別する男性の側への批判と重点を置き始めたと考えられる<sup>②②</sup>。

一方、芸術との関連で猥褻を論じるのが今一つの傾向である。この問題は、郁達夫『沈淪』を弁護する「沈淪」(二年三月)や、「对于戲劇的兩条意見」(同年三月)でも取り上げており、以前から周作人が関心を寄せてきた問題である。「猥褻論」では『感想録』から二つの具体的な例を引用する。長い引用文を要約すると、一つはかつて猥褻とされたラブレターの作品が今や何ら猥褻と感ぜられなくなったと語る記事と、いま一つはフランス女優の舞台での演技が猥褻だとロンドン紳士から干渉を受け、却って不愉快な演技になった事を批判する記事の二つである。「結婚的愛」での引用と同様、「不潔なもの」を見る側の問題とする事は、次のようなエリスの引用から明らかであろう。

我々は、そこに(猥褻の判断に：小川)どの程度、欠陥ある教育による傾向があつて改めるべきか、或いは、どの程度人心に除去すべき傾向があるのかは分からない。当然、猥褻の形式は時代によって変化し、日々変わりつつあるのだ。古代ローマ人が猥褻と思つた事

の多くを我々が見てもそう思わず、我々が猥褻と思う事の多くは古代ローマ人が見れば、我々の単純さを笑うであろう。(『感想録』)<sup>②③</sup>これは前者の記事からの引用の一部だが、猥褻とする対象が時代によって変化する事が猥褻を見る側の問題とする根拠である。また、ロンドン紳士へのエリスの批判が道学者にも通じるとして「偽道学者の不道德な所以をよく明らかにしている。何故なら、その反抗が実は意志薄弱で誘惑を受けやすい証拠そのものだからだ。」<sup>②④</sup>と述べ、新詩「高樓」付記でも、情詩を批判する道学家に対し、エリスを引いて反駁する。

極めて古くからの洞察だが、最も不貞な詩は最も貞節な人によって書かれ、最も清浄な詩を書いた人の生活は逆に最も不貞である。(『断言』「凱沙諾伐」)<sup>②⑤</sup>「文芸与道徳」では同じ文章から更に引用して、最も放縱な文学が基督教徒によって書かれたのは「ただ単に彼らの生活の厳正さがこの種の感情の運動をより一層必要としたからだ。」<sup>②⑥</sup>とその所以を説明する。欲望がすぐ行動となって、何ら心に痕跡を残さない自然と対照させ、芸術と社会について、エリスを次のように引用する。

ある一定の節制——性だけではなく、様々な人間の活動を含めて——は、欲望の幻想・イメージを育て、完成された芸術とするために必要である。ただし、社会的観点は純粹な自然とは異なる。社会では、欲求をすぐに気ままに行動に移す余地を我々は常には持てない。欲求を抑圧する弊害を避けるために、こうした欲求をより高い

穏和な方面へと移行させる方が、むしろ重要である。(『断言』『凱沙諾伐』) ㉔

「より高い穏和な方面」とは芸術の分野を指し、現実社会で実現されない欲求の代償を芸術に求めて、エリスはカサノヴァの日記を高く評価する。この「凱沙諾伐」の他に、「論左拉」からも引用して、同じ問題を取り上げている。その中で、周作人はゾラが生来禁欲的な環境に置かれて育ったことをエリスに依拠しつつ述べ、ゾラが猥褻な事を描いて非難を浴びた点について、次のように述べる。

このような状況下では、真の文学がどこまで成長できるか疑問である。文学がこうして人間の生の重要さとの接触が絶たれるからだけでなく、自ら進んでその接触を絶ち、社会的に限定された用語の範囲内で自由にいられる文人にも大作家となる英雄的な資質が無いからだ。用語の社会的限定は有用ではある。というのも我々すべてが社会の一員であり、放恣な俗悪を避ける保障があるべきだからだ。だが、文学においては、我々は読みたい、読みたくない本を自由に決める事ができ、(だから言語の放恣は別に害がない。)(『断言』『論左拉』) ㉕

最後のカッコ内の言葉は翻訳に際し、周作人が補ったもので、エリスの原文には無く、セミコロンの後に、原文では「そして、客間の話題と言葉とともに、文学の世界に入って行く作家に前途はないであろう。」㉔と文章を結んでおり、周作人の補注は原文の要約の範囲を超えている。つまり、この補注は翻訳の意図を明瞭にするもので、それ

ゆえ周作人の引用の主眼もここにあると考えられる。ここで周作人がエリス以上に用語の自由を強調したのは、「凱沙諾伐」の引用での猥褻とされる文学への弁護と論理的に対応させるためであろう。「言語の放恣」が是認されてこそ、新詩「高樓」付記での論理と一致する。即ち、「凱沙諾伐」での人間の欲求の代償作用という内面的な要請と

「論左拉」での「人間の生の重要な点との接触」という外面的な要請とで違いは認められるにせよ、どちらも文学においての用語の自由の必要と、欲求への社会的制限を指摘している点で共通する。特に「論左拉」の方では、個人としての選択の自由のある点、用語の社会的制約とは対照的に文学での用語の自由を裏付けている。その結果、「人間の生」の集合体たる社会での用語の制約を規定する道德規範と、その一員たる個人が選択する文学での道德規範は相容れぬものとなる。この見解は従来の猥褻の問題に対する見解よりも一層徹底している。

我々はこの小説が芸術的に描きだす、この葛藤(靈肉の葛藤：小川)を鑑賞しても、どちらの勝利か、何の寓意を込めたのか作者に示せと求<sup>メ</sup>てはならない。その価値は無意識に自己を露出し、芸術的に色情を昇華させたところにあり、そこに、真摯と普遍性が存在するのだ。(『沈淪』) ㉖

猥褻か否かを判断する基準は、「芸術的に色情を昇華させた」点と「真摯と普遍性」が存する点にあり、二二年当時の周作人の考え方として、ほぼ同一の見解が「对于戲劇的两条意見」㉗にも見られる。また、「沈淪」をボードレールの詩に喩えて、「頹廢派」の文学だとし、

『沈淪』は芸術作品ではあるが、「受戒者の文学 (Literature for initiated)」であり、一般の人の読み物ではない」<sup>⑳</sup>と限定していたが、「文芸与道徳」において、従来の基準を放棄してエリスの論理へと転換した以上、「受戒者の文学」という限定は不要となったといえる。ただ、この「受戒者」の限定にはもう一つの側面があった。

「文芸与道徳」以前の二三年三月「鏡花縁」でも、荒唐無稽な物語特有の面白みは所謂「受戒者 (The initiated)」だけが理解できる事と述べ、「沈淪」と似た形で読者を限定する。この類似は「鏡花縁」・「沈淪」での二つの見解を周作人が文学を特殊化する点で共通すると考えていた事を示す。

自己の想像の産物を述べるのは現世の実生活を述べるのと同様に真実であり、何故なら経験は決して身体感覚だけからとは限らないからだ<sup>㉑</sup>。

ここでの「想像の産物」としての文学と現実の対立は、「文芸与道徳」においてエリスを引用しつつ、文学を現実社会と対置させ、社会の道徳規範からの文学の自由を主張した論理と無縁では無い。この「鏡花縁」での見解がエリスの引用を行う下地を作ったと考えられる。

## 二、注記

- ⑰ 『自己的園地』「緑州」(岳麓書社一九八七年刊) p.124、E『断言』「論聖芳濟」 p.238
- ⑱ 『自己的園地』「緑州」 p.124
- ⑲ 『晨报副鰲』一九三三年「関于誰是犠牲的問題」(3/29; 月日)「離

婚与結婚」(4/25)他にも、「無条件的愛情」(6/20)「既真答周作人先生」附記」(6/22)等がある。

⑳ 『自己的園地』「緑州」 p.129

㉑ 翌二四年、婚約を破棄した相手の女性を非難する文章が上海『晶報』に載ったが、周作人は「溝沿通信之一・二」(『晨报副鰲』8/22、25)で男性側を批判する。

㉒ 『自己的園地』「緑州」 p.85、E『感想録』Ist. p.35

㉓ 『自己的園地』「緑州」 p.86

㉔ 『晨报副鰲』一九三三年(4/9)、E『断言』「凱沙諾伐」 p.115f.

㉕ 『自己的園地』「緑州」 p.90、E『断言』「凱沙諾伐」 p.116f.

㉖ 『自己的園地』「緑州」 p.93、E『断言』「論左拉」 p.150本稿で依拠したテキストではセミコロンのコンマになっている。補注を除いた完訳「論左拉」(『芸術与生活』所収、『駱駝』第一期一九二六年七月)で同箇所をセミコロンのみ記す。一九二四年とのみ記す。

㉗ E『断言』「論左拉」 p.150

㉘ 『自己的園地』「緑州」 p.62

㉙ 『戯劇』第二卷第三期(一九二二年、東大東洋文化研究所東洋学文献センター所蔵MF) p.2でも「猥褻か猥褻でないかの区別は、決して性欲だの性欲でないのという問題でなく、猥褻か猥褻でないかにある。遊戯的な玩賞は猥褻でなく、猥褻である。」とする。

㉚ 『自己的園地』「緑州」 p.114

## 三 『雨天的書』でのエリスの受容

二三年の夏の魯迅との訣別と前後して『自己的園地』を刊行した後、二三年十一月、「雨天的書・序」を皮切りに『雨天的書』所収の散文を書き始める。ほぼ半年後、周作人は翌年二月から再びエリスを引用する。まず「教訓之無用」では次のように引用する。

或る社会の或る時代・場所での道徳が、他の社会と、或いは同じ社会とですら、時代・場所が異なれば決して同じでないとはいえ、その間には複雑な条件があつて、差異を生んでおり、ことさらそれを明らかにしようとしても無駄な事である。もし人に「道徳的な書」を書いたと言われても、特に喜ぶこともなければ、「不道徳的な書」を書いたと言われて、落胆することもない。(『人生之舞踏』)

「道徳之芸術」②

この言葉に次いで、エリスが付した同書の注記からスペンサーの言葉「愛の宗教(リキリスト教：小川)が宣教されて二千年にもなろうとするのに、憎しみの宗教がいまだに勢力を持っている」③を引いている。猥褻の問題が結局は道徳的な判断に属すると考えるならば、二三年の「猥褻論」での「猥褻の形式は時代によって変化し、」というエリスの引用の延長線上にあると考えられる。

その同月に『知堂回想録』でのエリスの引用が「藹理斯的話」中に引かれ、前掲の『断言』の二つの文章の間に以下の引用が加わる。

まず(禁欲と耽溺の：小川)一方を極端にまでおしすすめて後にも

う一方に転じた人こそ、人生とは何かを真に理解し、後に模範的聖人として記憶される。しかし、この二重の理想を終始尊重する人こそが生活を心得た賢人である。……全ての生活は、建設・破壊、取り入れ・払い出し、構成・分解作用の永遠の循環だ。(以下略)④  
これは大きく言えば道徳の相対化という点で「教訓之無用」との接点もあるが、ここには二三年までの引用内容と直接の関連は見出しにくい。だが、やはり同月に書かれた「説「紡輪的故事」」には、エリスのこうした見解を踏まえて、周作人が自分の言葉に置き換えて説明していると思われる箇所がある。

本来、生活の芸術は禁欲にも耽溺にもなく、その二者が支えあい、取らんとしては拒み、拒まんとしては取って、旋律を生み出す人間の生にあり、一直線に進むのを貴しとはしない。耽溺は生活の基本で、蔑視すべきではなく、或る種の節制を必要とするだけである。

これが禁欲主義の用途で、その効用は更に満足を得る事のみであり、目的を離れては、それ自体に何の価値も無い。(傍線：小川)⑤

ここでの傍線部がエリスの見解を下敷きにしてある事は確実であろう。この言葉を周作人は「或る種の節制」つまり、「禁欲主義の用途」とは「更なる満足」を得るためであると解釈しているが、この「或る種の節制」は芸術のために必要としたものである。即ち「或る一定の節制——私は単に性の事について言うのではなく、様々な人間の活動を含めてを言うのだが——は欲求の夢想やイメージを育てて完成された芸術とするために必要である。」(前掲「文芸与道徳」)つまり、ここ

での芸術に要請された「或る種の節制」を生活にとりこみ、生活を芸術化する——「生活之芸術」への転化が周作人のエリスから得た論理と考えられる。「藹理斯的話」の他に、同趣旨の内容を「生活之芸術」という題目の下に繰り返し述べている事からも、その意図は明らかであろう。また、エリスの原文を再び比較すると、ここで周作人が「耽溺は生活の基本」とするのはエリスの「二重の理想を終始尊重する」のと異なる。禁欲に単に補完的な役割しか認めないのは、これと対応する。こうした周作人の論理は、二二年「你往何処去」<sup>ノオウツアグアイス</sup>に見られる類廃派への共感の中で生まれたと考えられる。

ペトロニウスの生活と著作（現存する『嘲笑録』の一部）を見ても、明らかに彼は近代の類廃派の祖で、それ故に《現代人》は共感するのだ。実際、当時ローマ朝廷内外の多くは、ネロ自身も含め、類廃派的ではあるが、極端に走った。ちょうど、基督教徒がもう一方に走ったようなもので、それ故にあの衝突が生まれたのだ。ある意味ではどちらも幸福な者といつてよく、その中で、靈肉の葛藤を感じ、美への終生の崇拜者で、なおかつ基督教の神秘的な力を、ただ一人感じ取ったペトロニウスのような人物こそ最も共感できる。なぜなら、これも《現代人》が彼と同様に感じる状況だからだ。

（傍線：小川・へ）は原語のまま）<sup>②④</sup>

傍線部の言葉は「藹理斯的話」での論理と酷似し、エリスの言葉の応用であるとも考えられ、二四年以前から、周作人が明確な形で表現せぬまでも、こうした論理を既に受容していた可能性が高い。この「類

廃派」という言葉を、周作人は二二年に初めて用い、「受戒者の文学」（前掲「沈淪」）という言葉と共に用い、限られた読者のためのものとし、ボードレールの作品に喩えた。つまり、この言葉の含意としては「沈淪」と同じく道徳的葛藤を持っている訳で、その葛藤に《現代人》たる周作人が共感を示した所に「生活の芸術」への転化の契機はあると考えられる。また、ここで注目すべきは、こうした論理が常に「類廃派」への共感と共に語られる点で、「読『紡輪的故事』」で紹介される作家モンデスもまた「王爾徳的童話」<sup>ワイルド</sup>⑤でワイルドと共に「類廃的唯美派」と規定され、児童の為の童話と文学的な童話の二つのうち、後者に分類される。この後者は「類廃派」とほぼ重なると考えられる。一方、その前者の童話については、教訓を注入することに反対し、「科学小説」（SF小説の謂）でエリスを引用する。

「童話を聞けない子供は自分で童話を作り出す——なぜなら、子供の精神的成長においてこれが必要とするからで、ちょうど身体成長に糖分を必要とするように——だが、子供は大概ひどい物を作るのだ。」医学雑誌の実例によれば、ある婦人が真実を用いて教訓をたれ、童話を捨てようとしたが、後に子供たちが却って恐ろしい物語を沢山作ったので、結局はやはり、『巨人を倒したジャック』を与えて、遊ばせたとのことだ。（『社会衛生的事業』<sup>⑥</sup>）

こうした児童から童話を取り上げ、教訓だけを与える事に反対する姿勢は、前述した「教訓之無用」のほか、二三年の時点ですでに見られ、「関于児童的書」では政治的な偏見を児童に注入するのに反対してい

る他、『自己的園地』の序文を書いてからの半年間に児童の爲の話劇を十数篇翻訳して、単行本『土之磐石』にまとめ、その序でも「私のこの何篇かの文章は児童や児童を愛する父兄教師の爲だけに書いたもので、徳もあり、文もよくする」人々と私は縁もゆかりもないのだ。」<sup>㉞</sup>と述べ、エリスの論理と同様に教訓注入に反対している。

以上の禁欲と耽溺の葛藤の調和、教訓の否定に見られる道徳の相対化と並んで、「薊理斯的話」では、もう一つ『知堂回想録』に引く『性心理之研究』跋文も引用されるが、これは時代觀念の相対化で、本稿の冒頭に引いた言葉を借りれば「中庸」の完成と言える。こうした見解について周作人は特に説明を加えていない。その点を明らかにするために、ここで二三年六月から十月のエリス引用が空白の時期に書かれた「新文学的『大潮流』」を検討する必要がある。

この論文は当時発表されず、二九年春、中国大学の学生だった方紀生のもとめにより、中大綺虹社『綺虹』第一期に発表された。脱稿後六年弱の間、この原稿が篋底に眠っていた理由を、公表にあたって、周作人は語っていない<sup>㉟</sup>。方紀生も、新文学の趨勢が簡潔明瞭に論じられており、また、現在の文壇の混乱に鑑み、先生に相談して同意が得られたので掲載すると付記しているのみである。つまり対外的に弁明の必要を周作人と方紀生ともに認めておらず、脱稿六年後も、なお変わらぬ論文への自信を周作人は持っていたと指摘できよう。その論文の冒頭で次のように述べる。

中国の新文学の趨勢は、将来二つの大きな流れに分かれるであら

う。今の言葉で言うなら、即ち革命文学と頽廢派である。この二者の発達はいずれも当然で、私から見れば、後者が或いは、より大きな勢力を占めるであろう<sup>㊱</sup>。

頽廢派への共感是指摘するまでもないが、革命文学も含め、その源は中国の現状への不満と不快の念で、「この源から二つの苗（革命文学と頽廢派：小川）の芽が出るのだ。」<sup>㊲</sup>と指摘し、その現実を目をそむけて「青年がどんなに国の栄光を謳歌しようと、愛国を叫ぼうと、最後まで真の芸術家の心眼を覆い隠して、彼らについて功を歌い、徳を頌える文章を書かせ得ない。」<sup>㊳</sup>とする。さらに、頽廢派が革命文学よりも発展する理由をこう解説する。

彼らは未来に信を置けず、現在にも不満で、むしろ過去を懐かしむでもないが、未来に比べて確かで、現在と比べ不確かであるため、過去を利用して利那にして永劫の情景を創造し、避る瀕ない心情をいくらか慰めるのだ。表面上は頽廢しているが、その精神はむしろ極めて現世的で、或いは革命文学以上により現世的と言えなくもない。私見によれば、革命文学は頽廢派と根本はもとと同じだが、革命文学はより樂觀的、感情的なのだ。<sup>㊴</sup>

つまり、頽廢派は革命文学よりも、現実をよく知り、それに比例して絶望しているが故に過去へ親近感を抱くことになる。傍線の言葉は、この引用に先立つ「こうした新文学にはしばしば復古のような現象があるが、それは決して復古ではない。本来、復古もある種の革新であった」<sup>㊵</sup>という言葉とともに、時代を相対化する考えがあったことを

裏付ける。循環史観の考えがエリスに由来し、この時期に定着した事は、『語絲』第二期に掲載された「諸理斯感想録抄」「一、進歩」からも見てとれる<sup>③④</sup>。そして、確実に、この見解は後の『中国新文学の源流』へと継承されていったと考えられる。この論文で最も高い評価を与えられるのは明代の公安派・竟陵派だが、その竟陵派の張宗子『陶庵夢憶』を二六年に兪平伯が校訂・刊行するにあたり、周作人は序文でこう述べる。(傍線：小川)

『夢憶』のは大方みな面白みのあるものだ。「現在」に対し、誰しもきつと不満があり、その上、我が身はその情況の中でいつも茫然として、深く味わうゆとりがない。だから多くの人は現実の世界から逃避する傾向があり、夢想あるいは追想だけが甘美な世界だと感ずるのである。ユートピアを語るのは願望の満たされぬ白日夢を見ているのであるが、老人が若い頃を思い出すのも愉快であろう。たとえ昨晩の事でも今日よりは面白い。これは別に保守とかいうのでなく、本当にこうした過去こそ、我々がのんびりと手にして玩賞するに堪え、幾らか筆を加えても構わないからだ。<sup>③④</sup>

ここでの論理は、ほぼ「新文学的・二大潮流」でのそれを踏襲している。また、ここで過去への愛着を示すのは、過去こそが「玩賞するに堪え」、「筆を加え」られるからで、つまりは「夢想あるいは追想」の対象となりうるからである。とすれば、先にも触れた「想像の産物」と「現世の実生活」を等価に見做す「鏡花縁」での論理の延長線上にあると考えられる<sup>③⑤</sup>。エリスに依拠して、「想像の産物」を改変可能な

過去に置換し、現実よりも重んじた所にこの論理が生まれたと言える。このように、「沈淪」「鏡花縁」に見られた頽廃派への共感がエリスの論理により、秩序だてられていったのが見て取れよう。

### 三、注記

③④ 『雨天的書』 p. 107、E 『人生之舞踏』「道德之芸術」 p. 246

③⑤ 『雨天的書』 p. 84、E 『断言』「論聖芳濟」 p. 220 途中の省略箇所は周作人による。

③⑥ 『雨天的書』 p. 173

③⑦ 『自己的園地』 p. 69 この『現代人』は、Contemporary, modern のいずれとも解せる言葉なので原語のままとしたが、以下に見られる革命・頽廃を同類とする見解や、従来の女性観からして後者の方が適切と思われる。

③⑧ 『王爾德的童話』(『自己的園地』所収 p. 66) で次のように述べる。「ワイルドはモンデスと同じく頽廢的唯美派だが、モンデスはその物語ではっきりと快樂主義の思想を示し」とワイルドとの共通点、相違点を指摘し、共に児童の童話でなく、「文学としての童話で、童話の変形の著しい例である。」とも述べ、童話を二つに分類している。

③⑨ 『雨天的書』 p. 168f、E 『社会衛生的事業』 p. 239、医学雑誌の実例も同書注記に拠る。

③⑩ 『知堂序跋』(岳麓書社一九八七年刊) p. 226

③⑪ 周作人は本文の最後で前半は脱稿の四箇月前(魯迅と訣別直前の二三

年六月)に書き上げ、後半は二三年十月に書き上げたと記す。

- ③『綺虹』第一期(一九二九年四月十日、東大東文研東洋学文献センター所蔵M  
F) p. 11

④『綺虹』第一期 p. 12

⑤『綺虹』第一期 p. 13f

⑥『綺虹』第一期 p. 13

⑦『永日集』 p. 132 E『感想録』Ist. p. 228 にこう述べる。「この生命の無限の新鮮さは永遠に減退せず、この古いものの新奇さは永遠に蘇る。我々は世界を一層よく理解できるはずだ。世界を固定的な完成に向かって進歩すると考えず、逆に噴水の連続した水のほとばしり、輝く火の柱と考えるならば。」この噴水等の比喩はヘラクレスイトスの言葉で、『性心理之研究』跋文でもエリスは引用し、周作人も訳出している。

⑧『知堂序跋』 p. 325f

⑨『鏡花縁』(注⑩参照)で「夢想は永遠に死なない。」とも述べる。

## 結 び

二四年の末、周作人は『語絲』の実質的主編として、発刊辞と共に「生活之芸術」を発表する。エリスの引用も「藪理斯的話」と一致し、ほぼ同趣旨である。ただ、『雨天的書』編訂時には削除された英詩が、初出誌『語絲』には文末に原文のまま引かれていた。

*Absinence Sows sand all over*

The ruddy limbs & flaming hair,

But Desire Gratified

Plants fruits of life & beauty there.

—William Blake—

これは本稿の一で論じた「愛的成年」で引かれたブレイクの詩である。ここでの再引用の意図は、一八年当時の「Absinence か、節制か」と貞操を欲求の否定として反対する解釈ではなく、「耽溺を基本」としつつ「更なる満足」を得る、禁欲と耽溺の理想的調和とする解釈に基づく引用であり、二四年当時の周作人の思想を反映するものであろう。また、この解釈は、五四時期の名残との訣別とエリスの論理の定着を、図らずも『語絲』創刊とともに、表明するものとなったのである。

〔付記〕 本稿の図表で対象とした一九三〇年までの文章のうち、『周作人年譜』(南開大学出版社一九八五年刊)中に記載されている『京報副刊』等の雑誌掲載の散文の一部は日本国内及び上海図書館でも目録しえなかった。